ヨーロッパを歩く(34) 最終回

名画を撮る

相談役 小西 長之助

パリには世界的に著名な美術館がたくさんあり、その多くは三脚とストロボを使わなければ、展示作品の撮影は自由だった。

かねてから泰西名画を画集や展示会図録などで鑑賞していたが、すべて額縁のない絵だけの印刷であり、色も原画に忠実でないものもあって不満だった。

だから5回のパリ滞在中に、ルーヴル美術館とオルセー美術館を各5回、オランジュリー美術館を2回、ピカソ美術館を1回訪ね、大口径の明るい標準レンズと、原画のカラーを忠実に写しとり、粒子が出ない超低感度ポジ・カラーフィルムを使って撮影した。

なかでもルーヴル美術館とオルセー美術館は、いつも大勢の観光客が展示室内を行き来しており、さらに有名作品の前は人だかりが絶えなかったので、人がいなくなるまで待ってシャッターを切っていた。だからかなりの時間と忍耐が要った。だが、毎回すごく楽しかった。

■撮影した作品の一部

ルーヴル美術館で

・民衆を導く自由の女神／ウジェーヌ・ドラクロワ
・カナの婚宴／パオロ・ヴェロネーゼ
・モナ・リザ／レオナルド・ダ・ヴィンチ
・ヴァルパンソンの浴女／ドミニック・アングル

オルセー美術館で

・睡蓮の池、緑のハーモニー／クロード・モネ
・草上の昼食／エドゥアール・マネ
・アルルの寝室／ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ
・林檎とオレンジ／ポール・セザンヌ
・ムーラン・ド・ラ・ギャレット／ピエール＝オーギュスト・ルノアール
・バレエの授業／エドガー・ドガ
・アレアレア／ポール・ゴーギャン

オランジュリー美術館で

・ココシャネルの肖像／マリー・ローランサン
・連作「睡蓮」（壁面）／クロード・モネ
・モン・スニ通り／モーリス・ユトリロ
・ポール・ギョームの肖像／モディリアーニ

ピカソ美術館で

・自画像／パブロ・ピカソ
・横たわる裸婦／パブロ・ピカソ
・手を組んで座るジャクリーヌ／パブロ・ピカソ
・接吻／パブロ・ピカソ

これらの作品を、興奮しながら撮影したことは、終生忘れることができない貴重で素晴らしい思い出となった。（終わり）

お礼

ヨーロッパでの私の生きざま（自分史）の記録でもある「ヨーロッパを歩く」を長らくお読みいただき、ありがとうございました。

出版紹介

この度、文集「パリ日記」を出版しました。この文集は、著者のパリでの生きざまの記述文24編と、ルーヴル美術館、オルセー美術館、オランジュリー美術館、ピカソ美術館で撮影した巨匠の作品の一部の写真26点を収録しています。

A5判・115ページ・付録（A5判写真「パリのカフェテラス」）・送料込み1500円

著者　小西　長之助（香川県支部）

日大通教部の思い出

富士登山・芸術祭等々

静岡県 袴田　毬子（元小中学校教員 92歳）

今から67年も以前、私は師範出の先生に負けまいと、日大の通教部に入学しました。

送付されてくる教材に目を通し、レポートを提出するのだった。代用教員をしながら、児童が下校した教室でうす暗くなるまで勉強したり、家に帰っても、続きのテキストに目を通したりした。

夏休みには上京し、一ヶ月ほど、二松学舎の下宿に世話になり、全国から集まった通教生たちと親しく寮生活を楽しんだ。

多くの思い出がある中で、私が印象深く思っているのは、富士登山だ。体育の得点になるというので、大勢の学生が参加した。早朝うす暗い中を九十九（つづら）折（お）りの山道、しかもゴロゴロ石の山道の登山は大変だった。遂に私は7合目辺りで軽い高山病にかかり、N先生に付き添われて室（むろ）で休んだ。十数分で快復し、みんなの列を追った。快晴で雲海から顔をのぞかせた太陽、初日を拝んだ。たとえようのない感激に満たされた。頂上で火口をのぞいたり、お宮様に手を合わせたり、鳥居の前で写真を撮ったりした。帰りは須走ルートを白い霧の中、下山した。ひざが躍った。

その他、世田谷でのスクエアダンスや運動会、体操、講堂での弁論大会や芸術祭が実施された。その折に私も、尺八に合わせて箏を弾いた。図書館も私はよく利用させてもらった。今思うと、懐かしさで胸がいっぱいになる。

優しかった諸先生方や、同室で過ごした友人たちにお会いできたらと思うが、それは無理。何しろ時代が流れているから。でも、若かった頃の向学心は少々、私の心の底にこびりついている。短歌や俳句を勉強したいと思っている。若ければ日大の通教の大学院の門をくぐりたいのだが。

町まちの文字 (39)

香川県支部 小西 長之助

その昔、金毘羅参詣客の上陸地であった丸亀の船溜り（新堀湛甫）を築造するため、江戸および近国で千人講をつくり、江戸の富商塩原太助の80両をはじめとした寄附により天保9（1838）年にできた信仰と航路標識を兼ねた青銅燈籠（「太助燈籠」と呼ばれている）の下部に刻まれた文字。

不味公の痔とへちま水

坂本育穂（昭和47年 文理学部英文学科卒）

殿様御麻疹後御痔疾之御気味になられ候について　暑中長途御旅行遊ばされ難き為御保養に替えさせられ　御発駕御延引遊ばされるべき旨　仰せ出され候　五月廿日」（松江中央図書館古文書講座資料「温故録」講師小林准士先生より）

殿様とは松江藩第7代藩主松平治郷（以下不昧・寛延4（1751）年～文政元4（1818）年）のことである。不昧は、それまで患っていた麻疹は平癒したが今度は痔を患い、保養が必要で参勤交代の江戸出府を延期したというものだ。時は、安永5（1776）年、不昧26才の年である。不昧は前年の安永4年松江に帰っており、今度は江戸への参府の年であった。不昧の参勤交代はこの時が5回目で「松平不昧伝」（以下不昧伝）によれば「6月以来大いに病む。江戸医京医に来診を仰ぐ。生母本寿院これを憂い神符を送る」とある。

件の痔疾を病むに当たって「京都よりお医師畑立庵を御招きに付き立庵は六日に到着」（温故録）した。畑立庵（京都府医師会発行京都の医学史は「畑柳庵」、不味伝は畑柳安、以下立庵）は、京都生まれで若年の頃から盛名高く、法源、後には法印となる。医師には僧に倣って法橋、法源、法印のランクがあり、最高の法印となれば天皇や将軍の脈を取る。立庵は天皇から賜った学名をそのまま学館「医学院」を創設、門弟2千余人に及んだという。

後の「江戸医京医」とは大阪の林一鳥（筆者注：昭和5（1768）年死去した同名の医師がいるが、同一の医師か否かは不明）、江戸より小牧寿庵（鍼医師）、立庵の弟子の横山柳珉、畠山柳悦であった（「殿様を診た医師達」・梶谷光弘）。生母本寿院も大黒天の供物、本庄摩利支天御符、目黒不動の御洗米、更に父天隆院（第六代宗衍）も山王祠神符、不動尊の御符、善国寺毘沙門御札を送って神仏に縋ったこと一方ならむものだった。

不味の頃の松江藩医は「第7代治郷公御代御給帳」（御給帳等から見た松江藩の藩医・梶谷光弘）によると年代不明だが、側医平山玄庵（130石）、加藤養本（180石）、林春皎（200石）、岡本瑞庵（300石）、北尾徳庵（20石5人扶持）、吉見玄益（100石）、太田玄仲（100石）がおり、他に側医格1、御隠居様お側1、医師19（うち本道一内科9、鍼3、外科2、その他不明5）で180石から5人扶持まで、又扶持米7～3俵迄の町医7、医師（町お目見医か）4で俸禄100石から10人扶持までがある。これら藩医に属する者は、

（次ページに続く）

日本大学通信教育部
大学院総合社会情報研究科

通信教育部長
総合社会情報研究科長
松重充浩

事務局長
瀬川一之
〒102-8005 千代田区九段南四-八-二八
電話 〇三-五二七五-八九〇一

日本大学校友会 副会長
日本大学通信教育部校友会 会長
鈴木勝
〒195-0062 東京都町田市大蔵町二九四五-二三
電話 〇四二-七三六-〇〇三四
FAX 〇四二-七三六-〇〇三四
携帯 〇九〇-七二七五-八三三三

日本大学通信教育部校友会 副会長・総務部長
日本大学通信教育部校友会 東京都支部 相談役
埼玉県支部 顧問
日本大学校友会埼玉県支部 常任幹事
肱岡堅一
〒344-0064 埼玉県春日部市南二-四-一六
電話 〇四八-七三八-七一三〇

日本大学校友会 常任委員
日本大学通信教育部校友会 副会長・渉外部長
鈴木孝司
〒350-0158 埼玉県北比企郡川島町伊草二三四-一
TEL FAX 〇四九-二九七-三六一八

日本大学校友会 常任委員
日本大学通信教育部校友会 副会長・幹事長
日本大学経済学部校友会 幹事長代理
目黒日本大学中学校・高等学校 評議員
北村周之
〒162-0813 東京都新宿区東五軒町六-三四
携帯 〇九〇-一六一五-二六五一
E-mail:airlineboeing747@gmail.com